

張洹氏藏北魏孝昌三年田阿赦石床について

— 付 洛陽市文物考古研究院藏北魏永安元年曹連石棺の孝子伝図 —

黒田 彰

〔抄録〕

小稿は、上海の張洹氏藏に掛る、新出の北魏孝昌三（五二七）年田阿赦石床を拓本によって紹介し、さらにその囲屏に描かれている、孝子伝図（原谷3、蔡順1、郭巨2図）を、図像学的に解説しようとする。本石床は、世界的に有名なボストン美術館藏北魏石室と同じ年紀を有する貴重なもので、和泉市久保惣記念美術館藏正光五（五二四）年匡僧安石床に次ぐ位置にあつて、例えばこれまでに例のない、原谷の三連図が描かれていることなど、孝

子伝図研究上の一級資料となつているにも関わらず、不思議なことに、今まで世に出たことがない。張洹氏の御好意により、その全貌を本誌上に報告しようと思う。

キーワード 張洹氏藏北魏孝昌三年田阿赦石床、孝子伝図、原谷

図、蔡順図、郭巨図

一

上海に張洹という収蔵家がいる、年紀の入つた北魏石床その他を所蔵しており、それらは未だ世に出されたことがなく、誰か信頼の出来る研究者を捜しているので、私を紹介してくれたという連絡メールを、呉強華氏から受け取つたのは、二〇一九年三月二十九日のことだつた。

有難いことに呉氏同道の許、上海の張洹氏に会えたのは、その年の九月七日のことである。一寸見ることのない工房を案内され、外ならぬ張洹氏が世界的なアーティストであることを知つたのもその時のことであつた。張洹氏の所蔵品は、ここに紹介する田阿赦石床を含む北魏石床二点及び、金明昌二（一一九一）年石床を始めとする、何点もの二十四孝を描いた宋代遺品は、極めて学術的価値の高いものであつて、

特に後者は、今後の精査を必要とする。さて、二点の北魏石床はその時、言わばベンチの型に復元され、その四枚の囲屏部に描かれた、一図ずつの写真撮影は、殆ど不可能と思われたので、二組の囲屏を一枚ずつに分解するように頼んでみた所（博物館や美術館などの所蔵品の場合、そんなことはまず無理である）、早速何人もの人手を掛けて、それらの撮影を可能にして貰えたのは、本当に有難かった。その折の成果は、翌年三月の拙稿「呉氏蔵王子喬石床について―付張洹氏蔵北魏石床二種―」（『佛教大学文学部論集』104）の巻頭図版に、二種計八枚の囲屏写真（立松洋行氏の撮影に拠る）を紹介し、新出の石床二種の概要を報告することが出来た¹⁾。それにしても、北魏の石床は、細い線を輪郭とする、ごく浅いレリーフで描かれることが多く、石面の状態によっては、何が描かれているのか全く看取れないことも屢々で、張洹氏の二石床は、保存は良かったが、原石の写真でどれ位、表現内容が再現出来るか非常に心配になったので（幸いなことに上記拙稿の写真は、立松氏が最善を尽くして見易く調整してくれた）、当日夕刻の歓迎宴の折、所蔵石床の学術研究のために是非、拓本を作られるように進言した。そのことがすぐに叶うとは思ってもいなかったが、二箇月を待たず十一月に入って間もなく、石床の拓本の精細なデータが届いたことには、本当に驚かされた。小稿は改めて、その拓本を用い、張洹氏の所蔵される二種の北魏石床の内、孝昌三（五二七）年田阿赦石床を紹介し、その囲屏の図像内容を報告しようとするものであり（もう一つの石床については、本誌の別稿を参照されたい）、二石床の原石写真（上記拙稿巻頭図版）を併せ参照願いたい。

まず巻頭の折込図版一―四は、当該石床の囲屏四面の図像内容を、拓本によって示したものである²⁾。また、続く図版五―八は、同年の十一月、洛陽市文物考古研究院、史家珍院長の好意により調査、撮影を許された同院蔵、北魏永安元（五二八）年曹連石棺の右、左幫中央下部に描かれた、四つの孝子伝図（6原谷〈右幫左。榜題「子孫原穀」、11蔡順〈同右。榜題「孝子蔡順」、4韓伯瑜〈左幫右、榜題「孝子韓伯余」〉、5郭巨〈同左。榜題「孝子郭巨」〉）の原石写真を併せて紹介したものである（立松洋行氏撮影）。同石棺は、『洛陽北魏曹連石棺墓』（科学出版社、二〇一九年。図35、図36、図43、図44に拓本図像が載る）に詳しく報告されているので参照されたい。当該石棺のことは、別途紹介する予定だったが、本石床の作られた翌年（永安元年は、孝昌四年に当たる）に製作され、しかも四つの孝子伝図の内の三つが、本石床と重なっていることから、併せて報告することとした。さて、本石床は、囲屏四面の外、脚部一式と石闕二点などを完備している（図一。但し、図一の写真からは、床部の石板が取り除かれている）。本石床の法量概要は、幅が二一六・〇糎、高さが九三・〇糎（石闕はそれより二―四種弱高い）、奥行が一〇七・〇糎となっている。さらに四面の囲屏（図版一―四）の法量を記せば次の如くである。

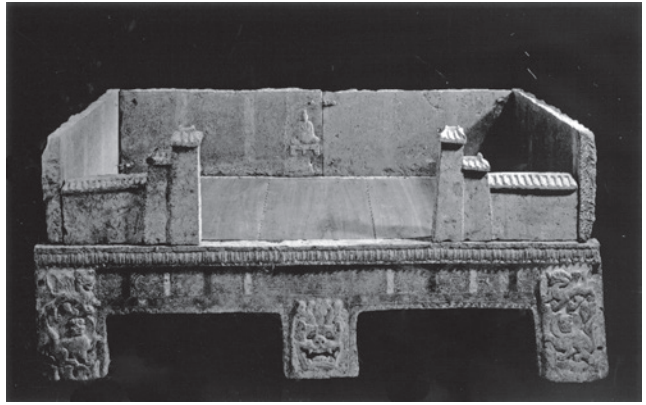
右側板——縦四二・〇糎、横一〇六・八糎、厚六・〇―六・三糎

正面右板——縦四一・二、横九二・三、厚五・五

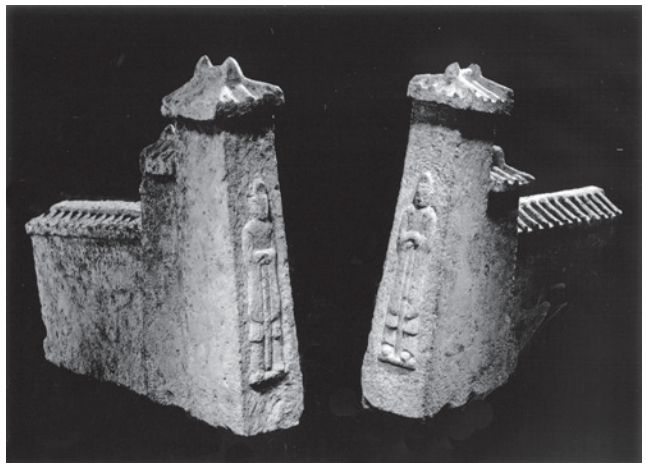
正面左板——縦四一・二、横九九・八、厚四・〇―七・七

左側板——縦四二・〇、横一〇七・〇、厚六・三

本石床には石闕が二、具わっているが（右は、高四三・五糎、左は高



図一 張洹氏藏北魏孝昌三年田阿赦石床



図二 石關のレリーフ

その誌文の部分を、原石の写真により示したものである。そして、誌文は、次のように判読される。

青州平原郡鄒田阿赦寄
居司州河南郡
河陰縣神龜元
年旨除首陽縣
令至孝昌二年
復除青州高密
郡太守至孝昌
三年中還京喪
於家若後人得
者為造福用
大魏孝昌三年
歲次丁未十二

月庚寅朔七日

丙申

右記を読み易くして示せば、次の通りである。

青州平原郡鄒田阿赦、寄居司州河南郡河陰縣。神龜元年、旨除首陽縣令。至孝昌二年、復除青州高密郡太守。至孝昌三年中、還京喪於家。若後人得者、為造福用。

大魏孝昌三年歲次丁未十二月庚寅朔七日丙申

それを見ると、本石床は、北魏孝昌三（五二七）年に造られた、田阿

四三・五種）、両闕の向き合う側面には、二人の武士のレリーフが彫り出され（図二）、本石床の作りのレヴェルの高さを示すと同時に後述、正面左板右の女性墓主像だけがレリーフとなっていることとの関連で（図版三右また、後掲図五参照）、注目すべきものと言えよう。

本石床は、墓誌を伴っていないが、それに代わるものとして、前脚部の中央に貴重な誌文が残されていて、本石床の制作年代が判明する。図三は、本石床前脚部の前面を拓本によって掲げたもので、中央の足の上に、件の誌文の刻されていることが知られよう。さらに図四は、



図三 本石床前脚部

赦という人物の墓に納められたものであることが知られる。田阿赦は、成書にその名を見ぬ如く、誌文によれば、山東省の人であつたらしい（青州平原郡は、山東省平原県。郎鄒県、未詳）。司州河南郡河陰県（河南省孟津県東。平陰故城）に仮り住居し、神亀元（五一八）年、勅命によって首陽県令（首陽県は、甘肅省渭源県）となり、亡くなる年の前年、孝



図四 前脚部誌文

て、先に触れた正面左板、右端の人物像即ち、女性墓主像を線刻、ごく浅いレリーフとするのではなく、深いレリーフつまり、レリーフそのものとして上げられる。図五は、本石床正面左板の原石写真を掲げたもので、その右端が女性墓主像のレリーフである。この点は、非常に特異で、このような事例は、これまで見たことがない（前脚部の誌文（図四）も同じ）。正面左半を横から見ると、女性墓主像のレリーフは、残りの左の平面より五耗以上高いのも驚きで、始めからレリーフの部分だけ整板せずに原石を残したものと考えられ、このことは、本石床の謎であつて、大方の教示を乞いたく思う。強い

昌二（五二六）年に青州高密郡の太守（長官）となったが、おそらく病のためであるう、翌年には洛陽の家に帰つて亡くなった。墓は、同年の十二月七日に完成したとある。本石床には後述、三人の孝子伝図が描かれているが、孝昌三年と言へば、やはり四人の孝子伝図を描いた、世界的にその名の知られる、ボストン美術館蔵北魏石室（寧懋石室）が同年に作られており、それとの比較においても、新出の本石床の学術的価値の-highいことが推し量られるのである。

本石床の図像内容は、向かつて中央に墓主夫妻（図版二左、図版三右）、その両脇の画面に馬（図版二中）、牛（図版三中）を描く点、北魏石床の通例に従い、正面右、左板におけるその他の人物達は、侍者（侍女）である。また、それに対し、残る右、左の二側板が全て孝子伝図で占められていることも同様である。中で、本石床の特異な点として、

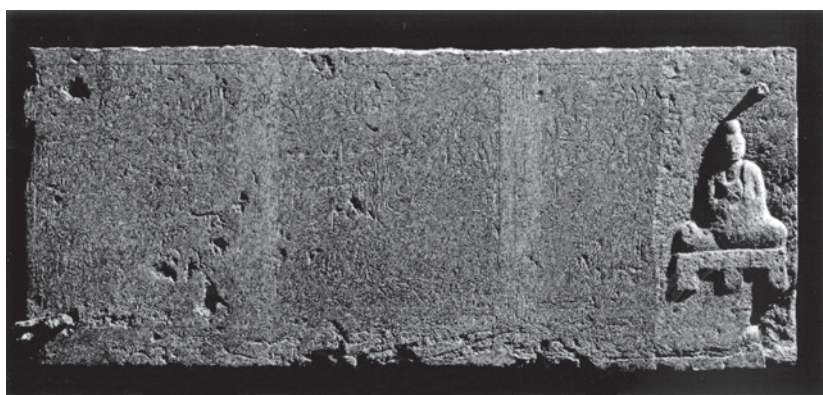
て想像を巡らせるなら、亡き女性墓主への殊更に強い思慕の念を表したものでしょうか。

二

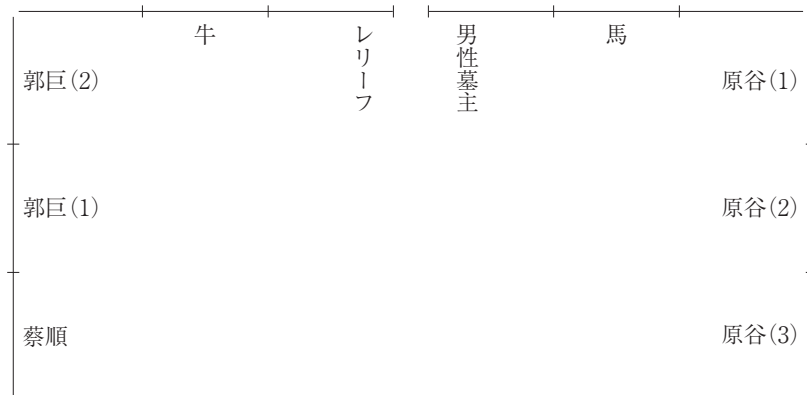
張洹氏藏北魏孝昌三年田阿赦石床の図像内容を、概念図化して示せば、図六のようになるであろう。図六を見ると、本石床は、囲屏四枚を各三画面に区切って、正面右板と左板を墓主関連の図像に当て、右側板と左側板との計六画面を全て、孝子伝図に当てていることが分かる。その孝子伝図の内容は、

- 6 原谷(1)
- (2)
- (3) (右側板)
- 11 蔡順
- 5 郭巨(1)
- (2) (左側板)

であり(アラビア数字は、陽明本孝子伝の目次番号)。右側板(1)(2)(3)については、後述。左側板に関しては、外側(左)から内側(右)へと捉えた)、原谷、蔡順、郭巨の三人の孝子伝図においては、原谷に三画面(即ち、右側板全て)、また、郭巨に二画面を割り当てていることが知られよう。以下、本石床の三人の孝子伝図の内容とその特徴について、概説を試みたい。



図五 女性墓主像のレリーフ(右端)



図六 張洹氏藏北魏田阿赦石床の内容



(1) (2) (3)

図七 原谷図

図七は、本石床の右側板の原谷図(1)(2)(3)を示したものである。本図は、担架に老人(祖父)を載せて、親子(祖父の子と孫)が担ぐ、(1)の特徴的な図柄から、原谷図であることが明らかで、本図の基ついたと思しい、両孝子伝6原谷条を示せば、次の通りである。⁽⁵⁾

【陽明本】

楚人、孝孫原谷者至孝也。其父不孝之甚、乃〔祖父年老〕厭患之。使原谷作輦〔扛〕祖父送於山中。原谷復將輦還。父大怒曰、何故將此凶物還。答曰、阿父後老復棄之、不能更作也。

頑父悔悞、更往山中、迎父率還。朝夕供養、更為孝子。此乃孝孫之礼也。於是閩門孝養、上下无怨也。

【船橋本】

孝孫原谷者楚人也。其父不孝、常厭父之不死。時父作輦入父、与原谷共担、棄置山中還家。原谷走還、賣來載祖父輦。呵嘖云、何故其持來耶。原谷答云、人子老父棄山者也。我父老時、入之將棄不能更作。爰父思惟之更還、將祖父歸家。還為孝子。惟孝孫原谷之方便也。举世聞之。善哉原谷、救祖父之命、又救父之二世罪苦。可謂賢人而已

原谷の物語は、中国においては孝子伝テキストが早くに散逸してしまつたため、その物語を見ることが極めて難しく(後世の二十四孝では、主人公の名前も元覚と変わってしまう(孝行録系)、纔かに太平御覽五一九に、逸名孝子伝の逸文一条が伝存するのみである。それも併せ掲げれば、次の通りである。

孝子伝曰、原穀者不知何許人、祖年老、父母厭患之、意欲棄之。穀年十五、涕泣苦諫。父母不從、乃作輿舁棄之。穀乃隨取輿婦。父謂之曰、爾焉用此凶具。穀云、後父老、不能更作得。是以取之耳。父感悟愧懼、乃載祖婦。侍養剋己、自責更成純孝、穀為純孫上揭三つの本文に見る原谷の物語は、全て同じ筋書を持つており、古代の原谷物語の姿を伝えるものと思われるが、今、本石床の原谷図(図七)を例えば陽明本孝子伝の本文によって考えてみると、(1)(左)は、原谷父子が祖父を「輦(輦)」に乗せて、山中へ遺棄に向かう場面(右が父、中央が祖父、左が原谷)、(2)(中)は、遺棄され

た祖父（中央）、父（左から二人目）、原谷（左端。右端にも（後述））、
 (3)（右）は、肩車される祖父（右上）、父（右下）、原谷（左）と比定
 されよう。言うまでもなく、(1)は、祖父を遺棄する往路、(2)は、山中
 に遺棄された祖父、ないし、山中での出来事、(3)は、山中から祖父を
 連れ帰る還路の情景を描いたものである。新出の本図（図七）は、右
 側板全ての画面を使った三連図として、原谷図研究における、非常に
 学術的価値の高いものと思われるが、以下にその理由を説明したい。
 本石床も含めて、管見に入った原谷図には、以下の十二図がある。

- (1) 後漢武氏祠画像石（武梁祠二石）
 - (2) 和林格爾後漢壁畫墓
 - (3) 四川樂山麻浩Ⅰ区1号崖墓
 - (4) 開封白沙鎮出土後漢画像石
 - (5) ミネアポリス美術館蔵北魏石棺
 - (6) 和泉市久保惣記念美術館蔵北魏石床
 - (7) ネルソン・アトキンズ美術館蔵北魏石棺
 - (8) 洛陽古代芸術館蔵北魏石棺
 - (9) C.T.Loo 旧蔵北魏石床
 - (10) 洛陽古代芸術館蔵北魏石床
 - (11) ネルソン・アトキンズ美術館蔵北齊石床
 - (12) 張洹氏蔵北魏孝昌三年田阿救石床
 - (13) 洛陽市文物考古研究院蔵北魏永安元年曹連石棺
- (1)―(4)の四図が後漢時代の原谷図で、(5)以下の九図が北魏期のそれである。さて、原谷図の見分け方は、左程難しくはない。画中に、祖父

を山中へ運ぶための担架（輦（輦。陽明本））が描かれるからである。北魏時代の例を、図八に示そう。図八は、

(8) 洛陽古代芸術館蔵北魏石棺（右）

(11) ネルソン・アトキンズ美術館蔵北齊石床（左）

の二つの原谷図を示したものである。(8)は、原谷が担架の後ろを、(11)は、前を担いでいるが、これは、原谷父子が山中に遺棄した祖父を家へ連れ帰る場面であろうと考えられる。(11)の右下に、祖父が描かれることは、後述する。図八の(8)、(11)の二図は前掲、図七の本石床(3)に当たることが明らかだろう。それに対し、漢代の原谷図(1)―(4)は、聊か図柄が異なっている。図九に、(4)開封白沙鎮出土後漢画像石の原谷図を掲げよう。(7)（榜題右から、「原穀親父」「孝孫原穀」「原穀泰父」。(1)―(3)もほぼ同じ図柄である）。これは、図八の(8)、(11)とは、場面が異なり、祖父を山中に遺棄した後、例えば陽明本に、

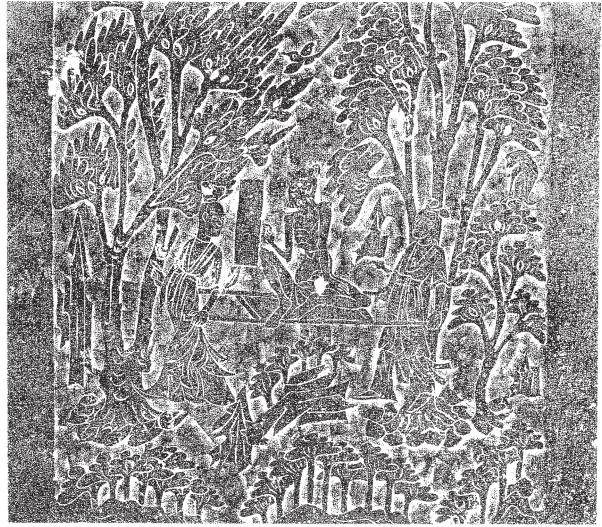
原谷復將輦還。父大怒曰、何故將此凶物還。答曰、阿父後老復棄之、不能更作也

などと言う、原谷が担架（輦）を持ち帰ったことで、父と論争になった場面を描いたものである。すると、漢代から北魏に掛けての原谷図には、少なくとも二つ以上の場面があったことが確実な訳で、かつて拙著『開封白沙鎮出土後漢画像石の孝子伝図―E・シャヴァンヌ1914による―』三章においてその問題を検討したことがある。(8)新出の本石床との関連において今、そのことを再検討しよう。当時知られていた石床の原谷図は、二連図を最大としていた。それが、

(6) 和泉市久保惣記念美術館蔵北魏石床

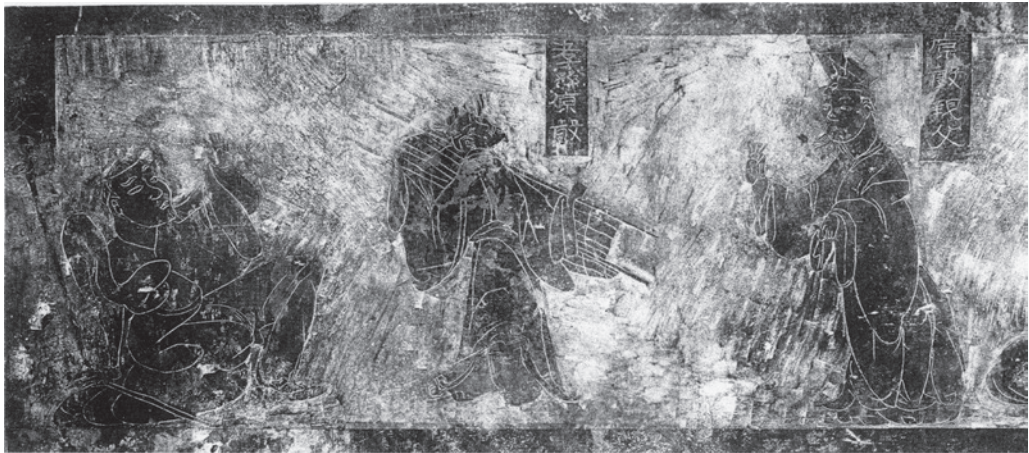


(11)



(8)

図八 (8)、(11)の原谷図

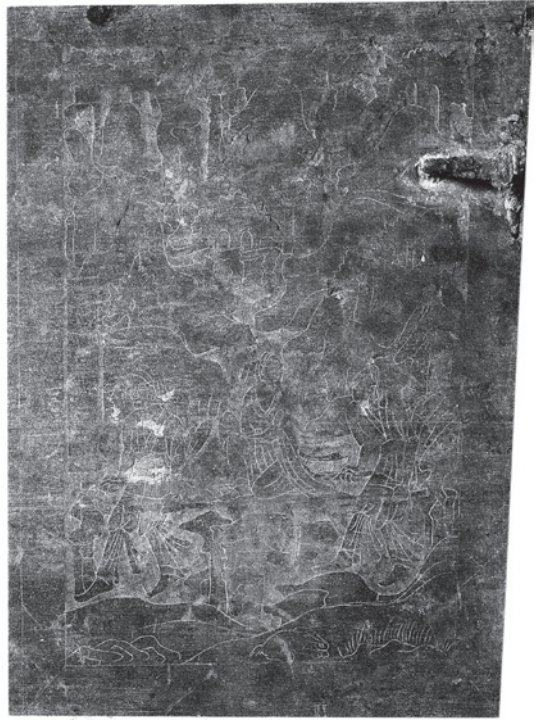


図九 (4)の原谷図

(9) C.T.100 旧藏北魏石床の二例である。図十に(6)、図十一に(9)を示そう(題記左から、「孝孫父不孝」、「孝孫輩還家」)。まず図十(1)、図十一(1)は、孝子伝に明記はされないが、山中に遺棄され、寂しそうな様子の祖父を描いたものである。そして、図八、(11)の右下に描かれていた人物こそが、この祖父に外ならず、このことは、図八の(11)は一見、一図の如くに見えるが、実は一面の内に、右下の、遺棄された祖父と、左上の、家へ連れ帰るべく、担架に乗せられた祖父との二図を、収めたものであることが判明するのである。即ち、図八(11)は、図十(1)(2)と同じ二場面を、一画面中に描いていることになる。次に、漢代の図九、(4)の図柄即ち、担架を持ち帰ったこと



(1)



(2)

図十 (6)の原谷図



(1)

(2)

図十一 (9)の原谷図

で争う父子の図像は、その右端に遺棄された祖父の図も配しているから、図十一、(9)の(1)(2)と一致し、換言すれば、(9)（図十一）は、(4)（図九）を二図に分けたに過ぎないものとも見做される。すると、新出の本石床(2)（図七）の図柄こそは、祖父と原谷父子との左右が反転し、担架こそ省かれてはいるが、漢代の(4)（図九）の図柄を、一図として忠実に継承したものとなっていることが知られるのである。

このように漢代以降の原谷図の場合、その場面数は一体、幾つあるのかの、よく分らないことが問題であった。以前、そのことを考えている時、二〇〇五（平成17）年のことだが、(6)和泉市久保物記念美術館蔵北魏石床（北魏正光五年匡僧安石床）を見する機会に恵まれた。(6)は正光五（五二四）年のもので、本石床（孝昌三（五二七）年、なお(13)の永安元（五二八）年は、その翌年に当たっている）と極めて制作年次の近い、遺品として注目すべきものであるが、その(6)の右側板が、

- 郭巨(1)
- 郭巨(2)
- 郭巨(3)

という風に、全て郭巨図で占められていることに驚いた。これが孝子伝図石床の研究史において、始めて知られる三連図の出現である。(6)の郭巨図の例を考えるなら、原谷図に三連図があってもおかしくないだろう。石床ではないが、石棺の原谷図には、そのことを強く示唆する例が、当時存していた。それが、(7)ネルソン・アトキンズ美術館蔵北魏石棺（北魏王悦（正光五（五二四）年没）石棺かと推定されてい



(1)

(2)

(3)

図十二 (7)の原谷図

る)に描かれた原谷図である。図十二にその(7)の原谷図を掲げよう⁽¹¹⁾。
 (榜題「孝孫原穀」)。図十二(7)のそれは、左から(1)(2)(3)と進む、三つの場面から成るものと考えられる。即ち、(1)は、遺棄された祖父、(2)は、持ち帰った担架のことで論争する父子、(3)は、祖父をその担架に乗せて家へ連れ帰る場面である。そして、その(7)の(1)(2)は、例えば漢代の(4)(図九)、また(9)の(1)(2)(図十一)、さらに本石床の(2)(図七)。但し、担架は描かれていない)と一致し、同様に(7)の(1)(3)は、(6)の(1)(2)(図十)と一致していることが知られるだろう。さらに新出(3)の原谷図(図版五参照。榜題「子孫原穀」)、右から祖父(左向き)、父、原谷(共に右向き)、担架を描いており、(7)の左からの(1)(2)を、右からの(1)(2)と入れ替えた体のものとなっている。

本石床の出現以前の原谷図には、その二連図はあっても(6)、(9)、確かな三連図が知られることはなかった。しかし、前述(6)における郭巨の三連図の出現や、(7)の原谷図などは、その三連図の存在を、強力に示唆していたのである。そして、飽くまで理論上の予想にしか過ぎなかった、待望の原谷図が、本石床の原谷図(1)(2)(3)(図七)として出現したことになる。

三

本石床の原谷図(1)(2)(3)(図七)と、これまでに知られていたそれとの研究史的概観は、上述の如くである。一方、本石床の原谷図(1)(2)(3)は、詳細を見ると、固有の将来的課題を幾つか孕んでいるようだ。以

下、気の付いた範囲で、その課題の一、二に触れておきたい。

例えばまず、原谷図(1)(2)(3)の進行方向の問題が指摘出来る。図七における(1)、(2)、(3)の進行方向は、左から右へと向かっているが(3)は、祖父を山中へ遺棄しようとする場面とは考えられない。悔いた父が祖父を家へ連れ戻すシーンであろう)、この点は、一般的な石床の孝子伝図の進行方向とは合わない。林聖智氏によれば、石床囲屏のその方向は、正面の墓主像(右、男性墓主。左、女性墓主)を中心として、右の外側から内側(即ち、中心)へ、次いで、左の外側から内側へ向かうものとされる⁽¹²⁾。また、全体的なその配列順序は、陽明本孝子伝の目次の順序に従うというものである。すると、本石床の原谷図(1)(2)(3)は、(3)を起点として、(2)、(1)へと進まなければならないことになる。つまり右から左へ進む筈である。すると、本石床の原谷図は何故、進行方向が逆になっているのか、ということを考える必要があるだろう。一つの仮説だが、そのことは、本石床全体の孝子伝図の配置に関わることらしい。前述の通り、本石床のそれは、

- 6 原谷 (1)
- (2)
- (3) (右側板、図七)

11 蔡順

- 5 郭巨 (1)
- (2) (左側板)

となっているが(6原谷図は、左から右へと進む。5郭巨は、後述)、その、(6)↓(5)↓(11)という順序に疑問があり、左側板を右として、(5)↓

(11)、↓(6)とあるべきものと思われる。即ち、最初は、現行の右側板と左側板とを逆にしたものが企図されたが、或る時点で、それを入れ替えた可能性がある。その理由は、(6)原谷は、父（祖父。共に男性）が孝の対象であり、男性墓主に相応しく、(5)郭巨、(11)蔡順は、母が孝の対象となっていて、むしろ女性墓主に相応しいことが上げられる。

本石床の原谷図(1)(2)(3)の図柄については、上記の通りだが、本石床の原谷図に即して、なお精細に見て行くと、特にその(2)、(3)の場合、上記とはまた、少し異なった見方も出来る。前述の通り、(2)(3)には担架が描かれていないが、その点と孝子伝本文との関わりは一体、どうなっているのだろうか。例えば祖父を連れ帰る(3)について、私はこれまで、担架を用いたものと考えていた。(3)の場面の基となった孝子伝本文を示せば、次の通りである。

・頑父悔悞、更往山中、迎父率還（陽明本）

・爰父思惟之更還、將祖父婦家（船橋本）

・父感悟愧懼、乃載祖婦（逸名孝子伝（太平御覽所引））

陽明本（船橋本）には、「迎父率還」（「將祖父婦家」とあるのみで、担架（輦）についての言及がない。一方、逸名孝子伝を見ると、「載祖婦」とあるので、こちらは、担架に乗せて帰る意となり（先賢伝〈令集解賦役令、孝子順孫条書入れ所引〉に、「亦輿而婦」と見え、図十一、(9)の(2)題記にも、「孝孫父輦還家」とも見える）、図八の(8)、(11)左上以下とよく一致する。しかし、その逸名孝子伝は、父を父母とし、祖父の遺棄場所を記さないなど（両孝子伝（「山中」、現存の原谷図がよったものとは一寸考え難い。おそらく陽明本系のテキストの

中に、例えば「亦輿而婦」（先賢伝）のような本文を持つものがあつたのであろう。或いは、両孝子伝の「迎父率還」（陽明本）、「將祖父婦家」（船橋本）も、担架に乗せて帰つたと解釈出来なくはないが、問題は、例えば図九、(4)以下に描かれる、原谷が担架を持ち帰つたことに関する、父子の論争が起きた時点と場所であらう。陽明本に、「祖父送於山中。原谷復將輦還。父大怒曰……頑父悔悞、更往山中、迎父率還」、船橋本に「棄置山中還家。原谷走還、賣來載祖父輦。呵嘖云……爰父思惟之更還、將祖父婦家」と記されることから、原谷は、担架を一旦、家に持ち帰つたのであり、そこで父が怒り出したらしい。すると、例えば図九、(4)の父子の論争が起きたのは、家においてとすべく、図十一、(9)の(2)や、図十二、(7)の(2)などは、便宜的に背景を山中としている可能性が高い。その観点から、本石床の(2)、(3)（図七）を見直してみると、まずその(2)の背景が山中であることから、(2)の左の二人（左から原谷、父）は、担架をめぐる論争をしている訳ではないだろう。まずその担架が描かれておらず、決定的なのは、父の話し掛けているのが、祖父であることだ。すると、(2)の左は、これまでに例のない新出の、祖父を連れ帰るべく、山中に向いた父子が、再び祖父に見えて挨拶している場面と捉えることが出来よう。その場面は、例えば陽明本の、「頑父悔悞」更往山中、迎父率還」と記す所と極めてよく一致する。さらに(3)の場面に、(2)と同様、担架が描かれないことも重要で（陽明本に、担架を「凶物」（逸名孝子伝「凶具」と言っていることが思い併される）、(3)も、陽明本に沿った、新出の場面となる。加うるに、不思議なことだが、従来の原谷図には、祖父を山中

へ遺棄する場面を描いたものがない。すると、本石床の原谷図(1)、(2)、(3)は、全て新出の場面と捉えるべく、おそらく本石床の原谷図は、これまでのその研究史を一新する、極めて学術的価値の高い遺品と結論される。

本石床の原谷図は、謎に富む。例えば図七、(2)の右端の人物である。それは原谷らしいが、岩や樹木が(2)を二場面に分けており(図十二、(2)の原谷と父の間にも、同様の現象が起きている)、図七、(2)の右端の人物は、未知のもう一場面の存在を示唆する如くである。今後の検討を俟つべき一例である。

四

本石床左側板には、左から、11蔡順、5郭巨(1)、(2)の三図が描かれている。図十三に示すのは、本石床の蔡順図である。管見に入った蔡順図には、本石床のそれも含め、以下の九遺品がある。

- (1)ネルソン・アトキンス美術館蔵北魏石棺
- (2)ネルソン・アトキンス美術館蔵北齐石床
- (3)C.I.100 旧蔵北魏石床
- (4)寧夏固原北魏墓漆棺画
- (5)ヴァージニア美術館蔵北魏石床
- (6)呉氏蔵北魏石床
- (7)襄陽清水溝M1南朝墓画象甗
- (8)張洹氏蔵北魏孝昌三年田阿赦石床

(9)洛陽市文物考古研究院蔵北魏永安元年曹連石棺
後漢の蔡順は、特異な人物で、孝子伝及び孝子伝図の扱いには、聊か注意を要する。例えば蔡順の説話を、テキスト面から整理してみると、

- a 嘗吐譚
- b 分樵譚
- c 助虎譚
- d 飛火譚



図十三 蔡順図

e 畏雷譚

f 噬指譚

g 枯樺譚

などといった、七つの物語が確認されるのである。その話材の豊かさは、どうやら過礼と称される漢末風俗を背景とする、本人の生き方があったようだが、⁽¹³⁾例えば両孝子伝においても、蔡順は、八つもの話材を収める36曾參などと共に、その成立法が注目される孝子となっている。但し、両孝子伝における蔡順条は、完全なものではないらしく、現行本に収められるのは、上記における、a、b、cの纒か三条分に過ぎず、d—g四箇条は、失われてしまったようである。そして、孝子伝図としての蔡順図を概観すると、(1)、(2)、(4)、(5)の四遺品は、d 飛火譚を描き（後漢書三十九 d、e、f 三譚が収められる）、類林雜説一・二「蔡順」、敦煌本事森（共に a、b、d、e の四譚を収める）以下に話が残る）、(6)、(7)（右半）の二遺品は、c 助虎譚を描く⁽¹⁴⁾（両孝子伝に基づく）。さて、本石床は、上記 e 畏雷譚を描いたものとなっている。e 畏雷譚は、d 飛火譚同様、両孝子伝には記載が見えず、古孝子伝を引いたと思しい、類林雜説、敦煌本事森の本文を示せば、次の通りである（後漢書を添えた）。

類林雜説

母生時畏雷。及葬後、每有雷雨、馳走繞墳大叫、順在此、順在此。太守聞之、每有雷、即給順車馬往墓。後漢人。

敦煌本事森

順母生時怕雷。每至大震雷電、順便走繞墳、大哭曰、順在此、願

孃莫驚。太守聞之、若遇天雷、給順車馬、令往墓所。太守韓置用順為南閭祭酒。出後漢書。

後漢書

母平生畏雷。自亡後、每有雷震、順輒圍冢泣曰、順在此。崇聞之、每雷輒為差車馬到墓所

また、古孝子伝の源泉の一、魏、周斐撰の汝南先賢伝の本文を示せば、次の通りである（重較說郭五十八所引）。（幼学指南鈔二三所引）

蔡順母平生畏雷。自亡後、每有雷震、順輒登塚泣曰、順在此

一方、孝子伝図の蔡順図に目を転じると、本石床と(9)とを除く七遺品の六つが、c 助虎譚、d 飛火譚を題材とするもので(7)左半を除く、

e 畏雷譚を題材とする本石床及び、(9)の出現は、非常に珍しく、これで管見に入った遺品は、(3) C.T.100 旧藏北魏石床（左側板中）、(7) 襄陽清水溝 M1 南朝墓画像甁、(9) 洛陽市文物考古研究院藏北魏永安元年曹連石棺の四例となる。図十四に、その(3)の蔡順図⁽¹⁵⁾（榜題「孝子蔡順」）、図十五に、(7)の蔡順図を掲げた⁽¹⁶⁾。(9)のそれは、巻頭図版六を参照されたい（榜題「孝子蔡順」）。まず本石床のそれから見ると（図十三）、右上に、廬（服喪のための仮小屋。廬^ろ壁^{へい}）右下に、墓に詣る参順（両手で供物を捧げるか）、左に、冢（土を盛った墓）が描かれる（銀杏が生えている）、その冢は、墓域を示す塀に囲われていて、正面の左右に立てられた二本の角柱は、華表であろう。また、それとは別途、廬の左に、膝立ちで廬を出、右手を高く上げて、左上を見上げながら叫ぶ、もう一人の蔡順が描かれているのは、とても珍しい。上部右上、左上に描かれるのが二人の雷神であり、蔡順は、「順在此」

と叫んでいるのである。このことは、本図が墓を守る、平常の蔡順及び、急に雷が鳴った時、廬から飛び出して冢を走り回り、亡母を安心させようとする蔡順という、二図を一図に併せた所謂、異時同図であることを示している。それをさらに顕著に示



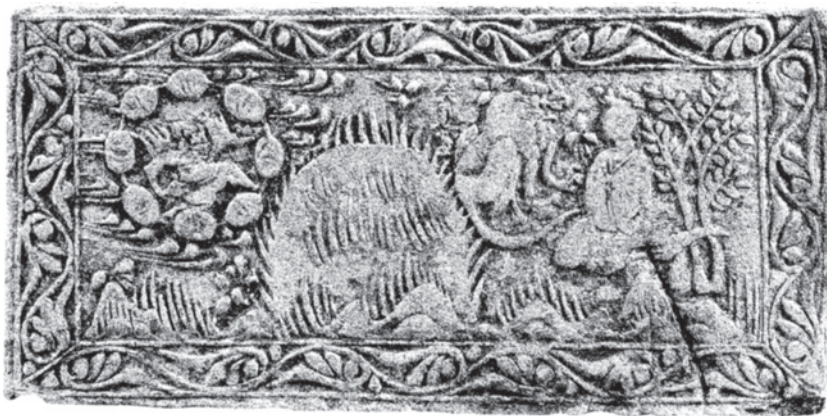
図十四 (3)の蔡順図

すのが、図十五、(7)の蔡順図で、当図は右から、拱手して跪く蔡順(左向き)、それに対する、口を開けた虎、冢、雷神(右向き)が描かれ、当図も、冢を中心とする、右半にc助虎譚(母の墓を守る蔡順が、喉に骨を詰ませた虎を助ける話)、左半に本石床と同じ、e畏雷譚を配した、謂わば異時同図なのである。それに対し、図十四、(3)の蔡順図は、右に、廬中に拱手、跪坐して冢に対する蔡順、左に、周囲を塙に囲まれた母の冢、左上に一人の雷神(右向き)を描いており、それは、恰も本石床における、廬から飛び出した蔡順(及び、左上の雷神)を省いた体となっていることが、非常に興味深く、やはり蔡順図の粉本として複数の画面、画材を持つものがあったことを示唆する点、本石床の蔡順図は、今後の研究課題を提供するものであることが疑いがない。図版六、(9)の蔡順図も同様で、右に、拱手、跪坐して冢に

対する蔡順、塙に囲まれた冢を配している。図版六、左の鬼神は、雷神と見ておきたい(但し、太鼓の付いた輪は見当たらない)。

最後に紹介するのが、本石床左側板中、右に描かれた郭巨図(1)(2)である。図十六に、それを掲げる。郭巨図の基づいた両孝子伝及び、逸文の残る宋躬孝子伝の本文を示せば、次の通りである(宋躬孝子伝の本文は、初学記二十七(太平御覧八一)による)。

陽明本



図十五 (7)の蔡順図(左半)



(1A)

(1B)

(2)

図十六 郭巨図

郭巨者、河内人也。時年荒。夫妻昼夜勲作、以供養母。其婦忽然生一男子。便共議言、今養此兒、則廢母供事。仍掘地埋之。忽得金一釜。々上題云、黃金一釜、天賜郭巨。於是遂致富貴、轉孝蒸々。贊曰、孝子郭巨、純孝至真。夫妻同心、殺子養親。天賜黃金、遂感明神。善哉孝子、富貴榮身。

船橋本

郭巨者、河内人也。父無母存。供養勲々。於年不登、而人庶飢困。爰婦生一男。巨云、若養之者、恐有老養之妨。使母抱兒、共行山中、掘地將埋兒。底金一釜、々上題云、黃金一釜、天賜孝子郭巨。於是因兒獲金、不埋其兒。忽然得富貴、養母又不乏。天下聞之、俱譽孝道之至也。

宋躬孝子伝

宋躬孝子伝云、郭巨、河内温人也。妻生男。謀曰、養子則不得營業、妨於供養。當殺而埋焉。鍤入地、有黃金一釜、上有鉄券曰、黃金一釜、賜孝子郭巨

郭巨図は、北魏時代にとても人気の高かった図像で、管見に入った郭巨図は、本石床などを含め、二十三例の多きに及ぶ。今、それらの遺品を一覧として示せば、次の通りである（場面数を仮にアルファベットで表記した。例えばABCは、三つの場面を持っていることを表わす）。

- (1) 江蘇徐州仏山画像石墓
- (2) 寧夏固原北魏墓漆棺画ABC
- (3) ミネアポリス美術館藏北魏石棺

- (4) 和泉市久保惣記念美術館蔵北魏石床 A B C
 - (5) ネルソン・アトキンズ美術館蔵北魏石棺 A B C
 - (6) C.T.Loo 旧蔵北魏石床 A B
 - (7) 洛陽古代芸術館蔵北魏石床
 - (8) ネルソン・アトキンズ美術館蔵北齊石床
 - (9) 鄧県彩色画像甁
 - (10) 襄陽賈家衝画像甁墓
 - (11) 陝西歴史博物館蔵三彩四孝塔式缶
 - (12) 吳氏蔵北魏石床 A B
 - (13) 吳氏蔵北魏石床脚部 (郭巨石脚) A B C D E F
 - (14) 吳氏蔵翟門生石床 A B
 - (15) ヴァージニア美術館蔵北魏石床
 - (16) 安陽固岸東魏石床 A B
 - (17) 襄陽清水溝 M1 南朝墓画像甁
 - (18) 襄陽柿庄 M15 南朝墓画像甁
 - (19) 吳氏蔵北魏崑崙石床 (臨深石床) A B C
 - (20) 北朝芸術博物館蔵北魏石床脚部 A B C D
 - (21) 張洹氏蔵北魏孝昌三年田阿赦石床 A B
 - (22) 張洹氏蔵北魏石床 (本誌別稿参照)
 - (23) 洛陽市文物考古研究院蔵北魏永安元年曹連石棺
- 本石床の郭巨図 (図十六) は一見、(1)(2)の二図の如くに見えるが、実は(1)(図十六左)の中央に一本の銀杏があつて、(1)を二図に分かっているの、本図は、三図から成っていることに注意しなければなら

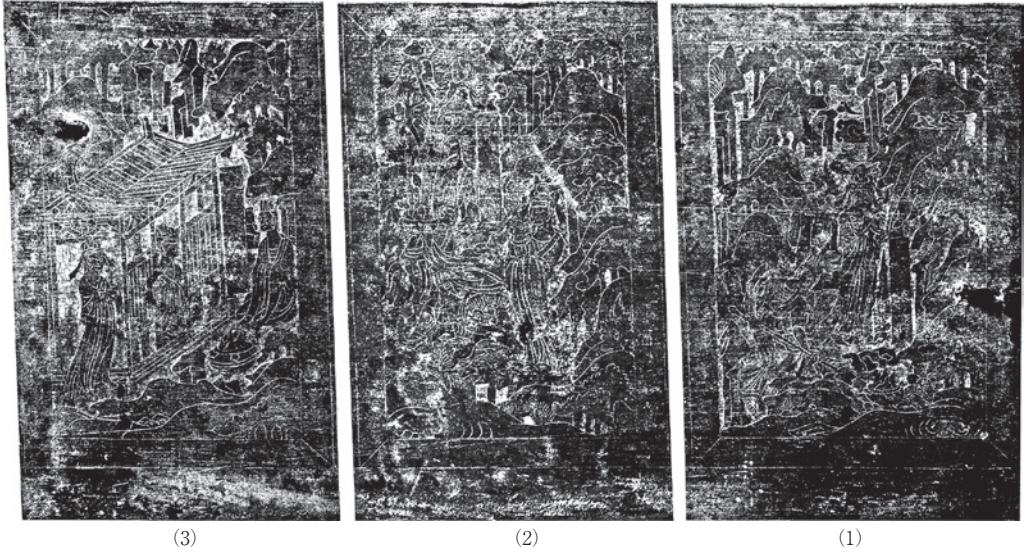
ない(今仮にそれらを1A、1B、2として括弧を付した)。まず1Aに描かれるのは、左から、甬すきを持つ郭巨、その妻が向き合つて立ち、その間に掘り出された黄金の釜、左向きに坐る子供となつてゐる。1Aは後述、穴掘り、黄金の場面である。次いで、1Bは、黄金の釜を持つ妻、子供を抱いた郭巨の二人が、右に進む情景を描き、1Bは、黄金の釜と子供とを家へ持ち帰る、運搬の場面に違ひない。また、2は、立つてゐる妻と郭巨(共に右向き。妻は左へ振り返る)及び、屋内に坐す子供と母親(共に左向き。前に黄金の釜が置かれるか)を描く、大団円の供養の場面となつてゐる。因みに、これも新出の(23)(図版八。榜題「孝子郭巨」)は、右から跪坐する郭巨(左向き)、黄金の釜、母、子供(共に右向き)を描き、(6)供養(大団円1)に当たるものだが、母が男性(冠を被る)に描かれるのは、誤刻であらう。さて、本石床の如く穴掘り、運搬、供養(大団円)の三場面から構成される郭巨図は、北魏時代の典型的なものと思われ、例えば上掲(4)和泉市久保惣記念美術館蔵北魏石床や、(5)ネルソン・アトキンズ美術館蔵北魏石棺などの郭巨図が、本石床のそれと全く同じ、三場面構成を取つてゐる。図十七に(4)⁽¹⁸⁾、図十八に(5)の郭巨図を掲げておく(榜題「子郭巨」⁽¹⁹⁾)。細かい説明は、省略に従うが、

図十六 1A——図十七(1)——図十八(1)

1B——(2)——(2)

2——(3)——(3)

の如く、郭巨図における三図の対応していることが、容易に看取れよう。



図十七 (4)の郭巨図



図十八 (5)の郭巨図

郭巨図の研究は近時、目を眩る展開を遂げた。一つは、呉氏蔵郭巨石脚の出現で、その場面数が飛躍的に増え、郭巨図のテキストも両孝子伝（宋躬孝子伝）の範囲には留まらないことが明らかになって来た。²⁰それを確定的としたのが、もう一つの、北朝芸術博物館蔵郭巨董黯石脚の出現で、当図は、物語に関わる詳細な題記を伴うなど、その大団円のあり方やテキスト、図像の細部を照らし出すことを始め、郭巨図研究の輪郭をも、大きく変えるに到っている。²¹ここでは、本図（図十六）をめぐる、その成果を摘記しておきたい。まず上掲、郭巨図については、次の①―⑧八つの場面の描き分けられていることが想定される。

- ①分財
 - ②供養（プロローグ）
 - ③道行
 - ④穴掘り、黄金
 - ⑤運搬
 - ⑥供養（大団円1）
 - ⑦官の黄金返還（大団円2）
 - ⑧丑祠
- 本石床や、(4)、(5)の郭巨図は、その内の④、⑤、⑥の場面を描いたものとなる。そして、①―⑧の場面を持つ遺品を、下段に示したのが表一、郭巨図場面一覧である。さらに、各々の遺品がどの場面を持つかを、次頁上段に示したのが表二である（但し、表一、表二共に、本石床（及び、張洵氏のもう一つの石床²²）また、²³を含まない。従って、

本石床は、表一の④、⑤、⑥に21A、21B、21Cとして加わり、表二に、²¹④⑤⑥として加わることになる。なお本誌別稿で紹介する、同じく張洵氏蔵に掛るそれは、表一の②に22として、表二に、²²②として加わるべきものである。また、²³は、表一の(6)に23A、表二に、²³⑥として加わる筈のものである。²⁴④⑤⑥の三図から成る本石床の郭巨図は、表二を見ると、遺品(4)、(5)（図十七、図十八）とのみ一致する場面構

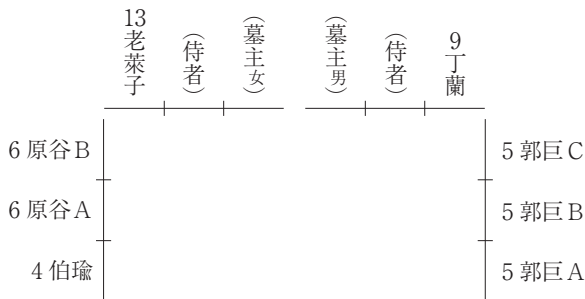
表一 郭巨図場面一覧

場面	遺品（アラビア数字）
①分財	13A
②供養（プロローグ）	2A (13A) 14A 20A
③道行	2B 13C 20B
④穴掘り、黄金	16A 1 17 2C 18 4A 20C 5A 6A 8 9 10 12A 13B 14B 15
⑤運搬	2B 4B 5B 13D* 19A*
⑥供養（大団円1）	3 4C 5C* 6B* 7* 11 12B* 13E* 16B* 19B
⑦官の黄金返還（大団円2）	13F* 19C* 20D
⑧丑祠	16B

*黄金なし

(20)	(19)	(18)	(17)	(16)	(15)	(14)	(13)	(12)	(11)	(10)	(9)	(8)	(7)	(6)	(5)	(4)	(3)	(2)	(1)	遺品	場面
② ③ ④ ⑦	⑤ ⑥ ⑦	④	④	④ ⑥ ⑧	④	② ④	① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦	④ ⑥	⑥	④	④	④	⑥	④ ⑥	④ ⑤ ⑥	④ ⑤ ⑥	⑥	② ③ ④ ⑤	④		

表二 郭巨図遺品の場面一覧



図十九 (4)和泉市久保惣記念美術館藏北魏石床の内容

成を持つていることが知られる。制作年代も近い三遺品が、かく酷似した図柄を持つことは、非常に興味深い問題で、共通の粉本の存在を強く示唆しているが、特に本石床と(4)和泉市久保惣記念美術館藏北魏石床との関連が注目される。先に述べた、本石床の左右の側板が元は入れ替わっていたという仮説に従うと（但し、郭巨図1A↓1B↓2の進行順序は、現行のそれで合っており、逆にはなっていない。入れ替えられた後に描かれたか）、本石床と(4)とは、共に右側板に郭巨図三図、左側板に原谷図三図（(4)二図）という、珍しい三（二）連図を共有していたことになる。因みに、(5)ネルソン・アトキンズ美術館藏北魏石

棺では、右幫の頭側から、

(1舜↓) 5郭巨↓6原谷

という各三連図が続く形となっている。これら三者の関係、特に本石床の孝子伝図と(4)のそれとの関係をめぐっては、今後の課題とすべく、参考として図十九に、(4)の内容を示す概念図を掲げておく。

なお図版七の韓伯瑜図については以前、同図における近時の研究状況に触れたことがあり（注(14) 前掲拙稿参照）、ここでの詳細は省くが（傍題「孝子韓伯瑜」）、画面右に、右を向いて合掌

し、下半身を曝し振り返る韓伯瑜、画面左に、右を向いて杖を右肩に当てて立つ母を描く構図は、ミネアポリス美術館蔵北魏石棺（正光五（五二四）年の元謚石棺である）の右幫の韓伯瑜図などに酷似しており（題記「韓伯余母与丈和弱」）、目下知られる同図における、十二番目の遺品となることを指摘しておきたい。

〔注〕

- (1) 拙稿「呉氏蔵王子喬石床について―付張洹氏蔵北魏石床二種―」（『佛教学文学部論集』104、令和2（二〇二〇）年3月）
- (2) 巻頭折込の図版一―四は、張洹氏提供の拓本写真に拠る（以下も同じ）。また、図版五―八は、洛陽市文物考古研究院提供の原石写真に拠る（立松洋行氏撮影）。
- (3) 図一は、張洹氏提供の写真に拠る（以下も同じ）。
- (4) 林聖智氏「北朝時代における葬具の図像と機能―石棺床囲屏の墓主肖像と孝子伝図を例として―」（『美術史』154（52・2）、平成15（二〇〇三）年3月）参照。また、林聖智説と孝子伝図との関係については、拙著『孝子伝図の研究』（汲古書院、平成19（二〇〇七）年）I 23を参照されたい。
- (5) 両孝子伝の本文は、幼学の会『孝子伝注解』（汲古書院、平成15（二〇〇三）年）による。後述逸名孝子伝の他、自余の原谷関連テキストについては、注（9）後掲拙著三章及び、その注⑭⑯⑰を参照されたい。
- (6) 図八右は、中国画像石全集8石刻線画（中国美術分類全集、河南美術出版社、山東美術出版社、二〇〇〇年）図版六二、図八左は、長廣敏雄氏『六朝時代美術の研究』（美術出版社、昭和44（一九六九）年）図版46に拠る。
- (7) 図九は、E・シャヴァンヌによる『Mission archéologique dans la Chine septentrionale, Tome I, Première, La sculpture à l'époque des

Han Paris, 1913) の PLANCHE V に拠る。

- (8) 拙著『開封白沙鎮出土後漢画像石の孝子伝図―E・シャヴァンヌ1914による―』（海外の幼学研究7、幼学の会、平成27（二〇一五）年）
- (9) 図十は、『北魏棺床の研究―石造人物神獸図棺床研究―』（和泉市久保物記念美術館、平成18（二〇〇六）年）図15、図16に拠る。なお当石床の孝子伝図については、同書に収める拙稿「和泉市久保物記念美術館蔵北魏石床攷」（注（4）前掲拙著I 25に再録）を参照されたい。
- (10) 図11は、C.T.Loo & Co. An Exhibition of Chinese Stone Sculptures (New York, 1940) Plates XXXII (Catalogue No.36) に拠る。なお当石床は、ボストン美術館に現蔵されることが判明している。
- (11) 図十二は、奥村伊久良氏「孝子伝石棺の刻画」（『瓜茄』4、昭和12（一九三七）年5月）。同氏『古拙愁眉―支那美術史の諸相―』（みすず書房、昭和57（一九八二）年）に再録）図一に拠る。
- (12) 林聖智氏注（4）前掲論文。
- (13) 拙稿「陽明本孝子伝の成立」（『京都語文』14、平成19（二〇〇七）年11月）第六章参照。
- (14) 拙稿「蔡順、丁蘭、韓伯瑜図攷―呉氏蔵北魏石床（二面）の連れの一面の出現―」（関西大学『国文学』101、平成29（二〇一七）年3月）参照。
- (15) 図十四は、注（10）前掲書 plates XXX (Catalogue No.36) に拠る。
- (16) 図十五は、『天国之享―襄陽南朝画像彫刻芸術―』（科学出版社、二〇一六年）歴史故事145頁に拠る。
- (17) なお董黯図の内に、蔡順のc 助虎譚、e 畏雷譚に由来する図柄の見えることについては、拙稿「呉氏蔵新出董黯石床Bについて」（『佛教学文学部論集』102、平成31（二〇一九）年3月）を参照されたい。
- (18) 図十七は、注（9）前掲書、図12、図13、図14に拠る。
- (19) 図十八は、奥村氏注（11）前掲論文、図一に拠る。
- (20) 拙稿「郭巨図攷―呉強華氏蔵北魏石床脚部の孝子伝図について―」（『佛教学文学部論集』98、平成26（二〇一四）年3月）参照。
- (21) 拙稿「北朝芸術博物館蔵の郭巨董黯石脚―呉氏蔵郭巨石脚との関連

―（『京都語文』26、平成30（二〇一八）年11月）参照。また、拙稿「呉氏藏東魏武定元年翟門生石床について―翟門生石床の孝子伝図―」（『佛教大学文学部論集』101、平成29（二〇一七）年3月）において、最近知られるに至った上記¹⁰以下の郭巨図の図版を収めたので、参照されたい。

〔付記〕

上海の張洄氏は二年前、貴重な所蔵石床の調査を許可また、私の勧めに従いその拓本を採って下さった。張洄氏の学恩に対し、心から御礼申し上げます。さらに私を張洄氏に紹介の上、上海まで同行下さった呉強華氏にも心から御礼を申し上げます。また、貴重な所蔵品の調査、撮影をお許し下さった、洛陽市文物考古研究院、史家珍院長に対し、深謝申し上げます。（中国社会科学院考古研究所、趙超教授が紹介の労を執って下さった。）なお小稿は、深圳市金石芸術博物館による北朝文化研究事業の一環である。

（くろだ あきら 日本文学科）

二〇二一年十一月十五日受理